

中国で仏僧が行ったジャダ

今井秀周

はじめに

北アジアや中央アジアには、古くからジャダという祈雨術が行われていた。特殊な石を使い、その石を水に浸けて雨を降らせるといふ術である。しかしこのジャダが中国に入ってきたという話を聞いたことがない。

北アジアや中央アジアのジャダは、様々な場面で使われていた。あるときは戦争の際、敵を風雨で翻弄するために、あるときは農耕のために雨を降らせたり止ませたり、またあるときは日常の暑気を払い涼を得るために、いわば実用的呪術として盛んに行われていた。それほど盛んであった術がどうして中国に入ってきたのであろうか。

筆者はジャダというものを知ってから、ずっとこうした疑問を懐いてきたのであるが、『高僧伝』にある仏僧の祈雨術を眺めていたとき、この中に、もしやと思われる記録を見つけた。もちろんジャダだとは書かれていないが、たいへんジャダに似ているように見えるのである。

これまで専らジャダを扱った論考には、篤淵一氏の「初期蒙古族の禱雨について」、岩井大慧氏の「遊牧民族鮮苔資料匯集」、遊牧アジ

ア北方民族の禱雨について、「瞿慮折娜考」といったものがあるが⁽¹⁾、しかし『高僧伝』の記事については言及されていない。そこで、拙稿では『高僧伝』に見つけた呪術を取り上げて、それがジャダである可能性を論じてみようと思う。

もし北方民族や西域のジャダが中国で実施されていたとすれば、それはアジアにあった諸種の宗教・呪術文化の交流を示す貴重な事実となるし、またそれが仏僧によって行われ、仏教の中国弘通に大いに貢献したとすれば、仏教史上においても興味深い事象となるであろう。

一 ジャダとは何か

『高僧伝』の記事を見るにまえに、ジャダの説明をしておかなければならない。

ジャダというのはモンゴル語で、邦訳すれば、「雨石」、「雨石を用いた祈雨術」である。西アジアでは、ヤダとかイエーデとか呼ばれ、その語源には諸説があつて、トルコ語であるとも、ペルシャ語であるとも言われている。中国ではこの音を鮮苔、札苔などと写した。拙稿では以下、雨石をジャダ石、雨石を用いた祈雨をジャダの術、と記すことにする。⁽²⁾

ジャダの術は、言葉どおり石を用いることを特徴とする。ただし石とはいっても、それは鉱物ではない。動物の胃腸や腎臓などにできる結石である。石は非常に硬く、砂粒のように小さなものから卵をはるかに超える大きなものまである。この成分はリン酸マグネシウムや炭酸石灰などで、色は主に灰白色。そこに腸管内にあつた諸種の成分が

加わると、黄・赤・緑・褐色などの様々な色や模様が付く。筆者は、馬の結石を岐阜大学農学部で見せていただいたことがある。それは直径が一〇センチくらい、灰白色で表面がすべすべのまるっこい形をしていて、硬く冷たくズッシリと重いものだった。説明を受けたところによれば、たとえこんなに大きいものが腹中にできて、よほど悪い部位にできない限り、動物にそうダメージは無いのだそうだ。

ジャダの術は、このジャダ石を水に浸ける。そして呪文を唱える。そうすると不思議なことに、雨が降ってくるのである。

ジャダの術の具体的方法を記した最も古い文献は、元の『輟耕録』である。そこにはモンゴル人の行ったジャダがこう記されている。

徃徃にして蒙古人の禱雨なるものを見るに、方士のごときにあらず。然れども印令・旗剣・符図・炁訣の類に至りては、一に用いる所なし。ただ浄水を一盆に取りて、石子数枚を浸すのみ。その大なるものは鶏卵の如く、小なるものは等しからず。然るのち密呪を黙持し、石子を將て洶瀟玩弄す。此の如くすることやや久しくして、輒ち雨あり。豈その靜定の功已に成りて、ただ此れに依りて以て人を愚するものならんや。そもそも果して異物ならんや。石子 名づけて鮮蒼と曰い、乃ち走獸の腹中より産する所にして、独り牛馬のもの最も妙なり。恐らく亦これ牛黄・狗宝の属なるのみ。

(『輟耕録』卷四、禱雨) (3)

ジャダの方法は、中国の方士らが行った印令・旗剣・符図・炁訣の類とは全く違っていた。しかし『輟耕録』の撰者陶宗儀はさすが知識人である。ジャダの術に全く驚いてはいない。鮮蒼石の正体を、摩訶不思議な石ではなく牛黄・狗宝の一種と見抜いていた⁽⁴⁾。牛黄・狗宝

というのは、中国で古くから漢方薬として用いられていた動物の結石である。陶宗儀の目に映ったジャダは、既に雨が降るのを見定めてから行った、ただの如何様であった。

明李時珍の『本草綱目』は、ジャダ石についてさらに細かな解説を行い、西域ではこの石を使った祈雨が盛んに行われていると述べて、番僧すなわち西域から来た僧の話を書いた。

嘉靖庚子の年、蕪州侯 一黄牛を屠殺して、この物を得たり。人に識る者なし。番僧あり。云く、これ至宝なり。牛馬猪畜には皆これあり。以て雨を祈るべし。西域に密呪あり。則ち霖雨 立ちどころに至る。呪を知らざる者も、ただ水を以て浸して搬弄せば、また能く雨を致さんと。… (『本草綱目』獸部卷五〇) (5)

西域で行われていたジャダの方法も、モンゴルと同じで、やはり動物の結石を水に浸すというものであった。

これより後世になると、ジャダの術は西域を旅した西欧人にもよく知られるようになり、そのバリエーションも記録された。たとえばジャダ石を小さな袋に入れて馬の尻尾に結びつけると風を呼べるとい、ジャダ石をベルトに付けると涼気が得られるという。またジャダ石は、風雨を呼ぶだけでなく、風雨を止めるのにも使われたという。

ジャダの術は現在でもまだ生き残っている。たしか西トルキスタンだったと思うが、筆者はテレビの紀行番組で、村人が雨を呼ぶ石を大事そうに見せていたのを覚えている。

ともかくどの時代の記録を見ても、ジャダの祈雨方法はほぼ同じである。その基本的な流れをまとめると――、まず器に水を盛る。そこにジャダ石を入れる。そして水をかき混ぜて、水中のジャダ石を転が

す。と同時に秘密の呪文を唱えるのである⁽⁹⁾。

二 『高僧伝』に見えるジャダ

『高僧伝』の中に筆者がジャダではないかと疑う祈雨術は二つある。古い順に見ると、一つは五胡十六国時代に涉公が行ったものである。涉公の事跡は、慧皎『高僧伝』の神異の巻、すなわち神秘的な術を駆使した僧の伝記を集めた中にある。

涉公なる者、西域の人なり。……符堅の建元十二年を以て長安に至る。能く呪呪を以て神龍を呪下す。早ある毎に、堅 常にこれに龍を呪せんことを請う。俄にして龍 鉢中に下り、天輒ち大いに雨ふる。堅および群臣 親しく鉢中に就きてこれを観、咸その異に歎ず。堅 奉じて国神と為し、士庶 皆身を投じ足に接す。是より復た炎旱の憂なし。 (巻一〇、神異下、涉公伝)⁽⁷⁾

涉公は、前秦の符堅(符堅)に請われて長安で祈雨を行った。それも早ある毎にというから、よほど涉公は祈雨術を能くし、成果をあげていたであろう。その涉公が行った術は、鉢の中に天から龍を招き下して雨を降らせるといふものであった。鉢というものは、僧が各自持っていた鉄鉢であろう。そこに呪呪を唱えて龍を下したのだから、鉢の中には水があつたに違いない。では水の中にジャダ石があつたのか。これについては何も書かれていない。とはいえ符堅や群臣は鉢の中を覗き込んでいる。とすれば鉢の中に何かがあつたのである。文面からすればそれは龍であるが、現実には龍という生物はいない。それなら龍を思わせるような物体、彼らが見たことのない物体があつたので

ある。おそらくそれは、ジャダ石でなかったかと察する。符堅らが鉢中を覗いたのは、祈雨が成功した後である。術に驚愕した彼らは、石のように石とは違う奇妙なジャダ石を、龍の一部あるいは龍の依代と見たのでなからうか。

もう一つの記録は、贊寧の『宋高僧伝』にあるもので、唐の高名な密教僧善無畏が行った術である。善無畏は、玄宗の命を受けて祈雨を洛陽で行った。

積善無畏、もと中印度の人なり。……暑天亢旱を属す。中官の高力士を遣わし、疾く畏を召して雨を祈らしむ。……有司 為に請雨の具を陳ぬ。幡幢螺鈸 備われり。畏 笑つて曰く、これ以て雨を致すに足らずと。急ぎこれを撤せしめ、乃ち一鉢に水を盛り、小刀を以てこれを攪す。梵言数百もてこれを祝す。須臾にして物の龍の如き有り。その大きき指のごとく、赤色。首を矯げて水面を瞰、また鉢底に潜る。畏 且は攪ぜ且は呪す。これを頃くして白氣有り、鉢より興る。逕上すること数尺、稍稍と引き去る。畏 力士に謂いて曰く、亟かに去れ。雨 至れりと。力士馳せ去る。迴顧するに、白氣の疾く旋りて講堂よりして西するを見る。一匹の素、空に翻りて上るがごとし。……

(巻二、訳経篇第一之二、唐洛京聖善寺善無畏伝)⁽⁸⁾
このとき善無畏は、鉢に水を盛ると、梵語の呪文を唱えながら小刀で水をかき混ぜた。そうしたところ、水の中からは指ほどの大きさの赤い龍のようなものが現れたという。

筆者は、これをジャダ石ではないかと推察する。ジャダ石は様々な

色をしており、赤色のものもある。赤色のジャダ石が、小刀で攪拌されたことによつて、水上に現れたり潜つたりしたのであろう。

ジャダの術ではジャダ石を水に漬けるが、そのとき術者はジャダ石にいろいろな働きかけをする。たとえば石を柳の枝で吊り下げたり、水中で石を揉んだり、また石を水中から取り出したりといったことである。小刀で攪拌したのは、そうした方法の一つと考えられる。

善無畏が攪拌に用いた小刀は、仏僧の携帯僧具である刀子だったかもしれない。しかし北アジアや中央アジアの牧畜生活者らはみな常に生活必需品として小刀を身につけていた⁽⁹⁾。この習慣は今も続いている。この習慣から見ると、小刀を用いて水を攪拌したのは、牧畜生活から生まれた所作であつたとも想像される。

小刀で鉢中を攪拌したという点に着目すると、涉公の記事があつた『高僧伝』神異の条にも同じような術がある。南朝梁の積保誌が行つた術である。

積保誌、本姓 朱。金城の人なり。少くして出家し、京師の道林寺に止まれり。……天監五年の冬 早あり。雩祭 備え至るも、而も未だ雨を降らさず。誌 忽として上啓して云く、誌の病 差えず、官に就きて治めんことを乞う。もし不啓なれば、百官 応に鞭杖を得るべし。願くは華光殿に於て勝鬘を講じ雨を請わんと。上 即ち沙門法雲をして勝鬘を講ぜしむ。講 竟夜にして便ち大いに雪ふる。誌 また云く、一盆水を須むと。刀をその上に加う。俄にして雨 大いに降る。高下皆足る。(卷一〇、神異下、積保誌伝)⁽¹⁰⁾

梁の天監五年の冬、早が続いたため、梁の武帝は中国王朝伝統の雨

乞い儀式である雩祭を行つた。ところが念入りに行つたにもかかわらず、雩祭の効果は現れない。そのとき都の健康にいた積保誌が、二つの祈雨法を申し出た。一つは勝鬘経を講じること、もう一つはジャダのような術を行うことである。後者は保誌自らが行つた。彼は浅い器に水を入れて、そこに刀を加えた。そうすると俄かに大雨が降りだし、人々は十分に潤つたという。

この術で、盆水の上に刀を加えたというのは、おそらく善無畏と同じ所作であろう。刀というと、つい大きな刀を考えてしまうが、それでは術の様子がよく分からない。小刀ならば理解は容易である。そして小刀で水を攪拌したのだとすれば、水中に龍のような石のあつたことが想像される。しかし残念ながら、この記録は甚だ簡略で、術の細部が分からない。今は付記するに留めておく。

ところで善無畏の伝には、水中から赤い龍のようなものが現れたあと、白気が立ち昇つたと云う。これと同じような光景は後世にも記されている。中央アジアを探検したパラスが聞き書きしたものである。そこには、「ジャダ石を水に入れると渦をまき、水はまるで沸騰したように動く」とある⁽¹¹⁾。こうした話を読むと、まるでジャダ石を水に入れると化学変化が起こつて、シウシウと激しい泡が出たかのようである。

しかしそんな変化が起るはずはない。結石を溶かせるのは強い酸だけである。そのような酸はたやすく入手できるものではないし、どこにでも持ち運べるものではない。不思議な白気や渦の話は、ジャダ石を神秘視したことから生まれた、空想の産物だと考える。

激しい泡は出ず、白氣も生じないとすれば、なぜジャダ石と雨の関連が生まれたのであろうか。おそらくジャダ術の誕生時に、術者の何か不思議な体験があつたのであろうが、それを示す記録は残っていない。ただ岩井氏によれば、石が雨を降らせるという話は世界に散見されるという⁽¹²⁾。

三 仏僧のジャダは西域からもたらされた

右にあげた涉公と善無畏の祈雨術には、ジャダの名はなく、肝心の石の存在も明確ではない。しかしそれでも、彼らの術をジャダだと見るのは、これらと似た祈雨術が外には見当らないからである。仏鉢に水を盛り、その水中に龍を思わせるような不思議なものが入つていて、しかも時にそれを攪拌するという術は、たいへんユニークなものなのである。

そこで本章では、他の祈雨術を概観しながら、術のユニーク性を手掛かりに彼らの術の出所を探ってみようと思う。

(一) 中国の官民が行つた祈雨の術

まず中国に古来あつた祈雨法を眺めてみる。これには実に様々なものがあつた。

最も基本的な祈雨は、神を祭るものであつた。祭る神は身分によつて違つていた。皇帝は、天、地、宗廟、社稷、靈星などを祭つた。役人や庶民らは、土地神、城隍神など地域の守り神や、名山、大川、海といった自然神、そして龍蛇など、水に関係する人物、自然、動物な

どの神々を片つ端から担ぎ出して祭つた⁽¹³⁾。

また皇帝や役人らの間には、直接神を祭るのでなく、政治の失を改め、己の行いを正して神の心を動かし、雨を降らせようとする方法があつた。これはいわゆる天人相関の思想によるものである。一例をあげると『後漢書』曹褒伝に、

(永元七年) 出て河内の太守となる。時に春夏大旱ありて、糧穀踊貴す。褒到るや、乃ち吏を省ぎ職を并せ、姦残を退去す。澍雨しばしば降り、その秋 大孰す。百姓 給足し、流冗 皆還る。

(卷三五)⁽¹⁴⁾

ということが見える。天人相関思想が強かつた中国では、この結果雨が降つたという記事は、枚挙するに暇がない⁽¹⁵⁾。

とはいえ中国の祈雨全体からいえば、祭神よりも呪術によつたことの方がより多かつた。たとえば土で龍形を作つて雨を乞うた習俗があつた。董仲舒の『春秋繁露』求雨の条には、

甲乙の日を以て、大蒼龍一を為る。長八丈、中央に居く。小龍七を為り、各長四丈、東方に於て皆東郷す。その間相去ること八尺。小童八人、皆齋すること三日、青衣を服してこれを舞わしむ。田疇夫もまた齋すること三日、青衣を服してこれを立たしむ。諸の里社これを通じて閭外の溝に於て五蝦蟇を取り、社中に錯置す。池 方八尺、深さ二尺、水蝦蟇を焉に置く。清酒・膊脯を具え、祝齋すること三日。蒼衣を服し、拝跪して祝を陳ぶること初めの如し。

(卷一六)⁽¹⁶⁾

とあり、四季それぞれの土龍の作成法が語られている⁽¹⁷⁾。同様な習俗

はその後も継承され、たとえば『唐書』の馬璘伝にも、

(永泰の初め)、天 大旱あり。里巷 土龍を為り、巫を聚めて以て禱る。璘曰く、早政の修めざるに由ると。即ち命じてこれを撤せしむ。明日雨ふる。この歳 大いに穰る。(卷一三八)⁽¹⁸⁾

という話が見える。

呪術の中には、甚だ過激なものもあった。

(戴封) 西華の令に遷る。……その年大旱あり。封 禱請するも獲るなし。乃ち薪を積みてその上に坐し、以て自ら焚く。火 起るや大雨暴に至る。ここに於て遠近 歎服す。

(『後漢書』卷八一、独行伝、戴封)⁽¹⁹⁾

このように人間を犠牲にして雨を乞うという習俗は古くからあり、後世では人体に代えて爪髪を焼くとか、野に身を暴露して犠牲のふりをするという形に変わった⁽²⁰⁾。右の戴封も、実はこのとき焼死しはしなかった。

右のような立派な儀式を行ったのは、高位高官らであった。いつばう庶民の行ったものは、もつと簡素な術であった。たとえば前掲『輟耕録』の文中にあった印令・旗劍・符図・炁訣といった術がそれである。それぞれがどのような術であったかは不詳であるが、これらは元代に限らず古くから巫覡や方士、また道士らによって行なわれていたもので、今に伝わる道教儀式の調査などを参考にすれば、ある程度まで想像ができる。炁訣というのは、炁は氣に同じであるから、ある種の念力を用いた術であろうか。符図は、符録や図讖のことであろう。旗劍は靈力をもつ旗や劍を用いる術であろう。『三国演義』の中に、孔明が周瑜のために風向きを変える術を行ったときのこと、七星壇を

設け、そこ旗や劍を並べたという話がある⁽²¹⁾。おそらくそうしたものであろう。また印令というのは、指を組み合わせて印を結ぶ術であろうか。あるいは令牌のような印形の呪具⁽²²⁾のことを指すのかもしれない。

因みに庶民層があつく信仰した道教の經典に、祈雨の方法はどう書かれているかといえ、身を清めてひたすら道教經典を念誦せよとある⁽²³⁾。

さてこうした例を挙げていくときりがないので、この辺りで止めるが、とにかく中国古来の術の中には、涉公や善無畏の術と似たものはない。この事実は、善無畏らの術が中国にもとからあったものでないことを示している。だからこそ苻堅が、玄宗が彼らの術に興味をもち期待したのであろう。

そこで前掲の伝記に、二人の出身地を見ると、兩人とも西方の出である。涉公は西域の人である。善無畏は中インドから西域を通って唐の都にやって来た人物である。因みに保誌のことも付け加えると、彼の出身地は金城で、そこは中国の西端、つまり西域の東端であった。こうしたことから考えれば、彼らの術はおそらく中国外の、なかなしく西方で行われていたものと推察される。

(二) 仏僧が行った祈雨の術

つぎに中国で仏僧が行った祈雨の例を眺めてみよう。

仏僧の祈雨術は、ほぼみな同じ形をとっていた。西方から来た僧であつても、中国で生まれ育った僧であつても、行った術は大抵ひたすら經典を誦誦し、陀羅尼すなわち梵語の呪文を唱えるものであつた。

『高僧伝』の中から例を引いてみると、晋末のインド僧曇蓋の伝に、
 (晋の元興の末)、時に竺曇蓋・竺僧法ありて、並びに苦行通感す。
 蓋 能く神呪もて雨を請い、楊州刺史司馬元頤の敬する所となる。

(卷一二、誦經七、積法相伝) (24)

とあり、中国生まれの高僧慧遠の伝に、

潯陽 亢旱す。遠 池の側に詣り、海龍王經を誦む。忽として巨蛇
 有り、池より空に上る。須臾にして大いに雨ふる。歳 以て年有り。

(卷六、義解三、積慧遠伝) (25)

とある如くである。要するに仏教が教えた基本的祈雨法は、仏の力に
 すがる読經だと言つてよい。——もつとも読經といつても、仏僧に祈
 禱を依頼した者から見れば、それは西方から来た呪術である。

慧遠が誦誦した『海龍王經』は、仏陀が雨水を司る龍王に説法した
 ことを記したもので、祈雨に最適な經典として、多くの僧に用いら
 れた。このほかよく用いられた經典には『孔雀明王經』や『勝鬘經』が
 あつた。『孔雀明王經』は、一切の除災と諸願の成就を説いたもので
 あるから、早を止めるにも雨を降らせるにもよいと考えられたのであ
 ろう。しかし『勝鬘經』は、とくに雨と関係した内容を持つていな
 い。おそらく雨を祈るには自分が最も得意とする經典を誦むのがよい
 という考え方があつて、学ぶ者の多かつたこの『勝鬘經』がよく用い
 られることになつたのであろう。

読經や誦呪に比べると、仏僧の祈雨呪術の記録はわずかである。そ
 してその大部分は密教的なものであつた。密教が、ヒンドウ教などの
 影響を受けて多分に呪術的内容を持つてゐることは、説明するまでも

無い。

善無畏は、周知のとおりインドから中国に密教を伝えた代表的人物
 である。そうすると前掲善無畏の祈雨術は、インドから齎されたもの
 であろうか。筆者はインド仏教については門外漢であるのでこの疑問
 を徹底して追求することができないが、しかし漢文文献や漢訳仏典か
 ら見る限りでは、その可能性は低いと思う。同じような術は他には見
 られない。

善無畏亡きあと中国密教界の中心人物となつた不空が⁽²⁶⁾、多くの祈
 雨記録を残しているから、そのあたりから唐代に行われた密教の術を
 伺つてみると、たとえば『西陽雜俎』には四種の術が載つている。

梵僧の不空、總持門を得。能く百神を役し、玄宗これを敬す。歳常
 に早ありて、上 雨を祈らしむ。不空言く、某日を過ぐべし。これ
 を祈らしめれば、必ず暴雨ありと。上 乃ち金剛三蔵をして壇を設
 け雨を請わしむ。

連日暴雨止まず、坊市に漂溺する者あり。遽に不空を召し、これを
 止めしむ。不空 遂に寺庭中に泥龍五六を捏ね、溜水に当たり、胡
 言もてこれを罵る。良久しくして復たこれを置き、乃ち大笑す。頃
 有りて雨霽る。

玄宗また嘗て術士の羅公遠を召し、不空と同一に雨を祈り、互に功力
 を校べしむ。上 俱に召してこれを問う。不空曰く、臣 昨白檀香
 の龍を焚けりと。上 左右をして庭水を掬い、これを嗅がしむ。果
 して檀の香氣有り。

……不空 雨を祈る毎に、他軌なければ則ち但だ教繡座を設け、手
 もて数寸の木神を簸旋し、念呪してこれを擲つ。自ら座上に立ち、

木神を伺う。吻角に牙出で目瞋けば、則ち雨至る。

〔西陽雜俎〕前集卷三、貝編⁽²⁷⁾

この話を載せた『西陽雜俎』は怪異譚などを集めたものであるから、不空が本当にこれらを行ったのかどうか、定かではない。趙遷が撰した「大唐故大德贈司空大弁正広智不空三蔵行状」には⁽²⁸⁾、不空が行った二つの祈雨が記されているが、どちらも『西陽雜俎』の載せる話とは合致しない。しかしながら『西陽雜俎』が全く架空のものを創作して載せたとは思えない。たとえ不空が行ったことでないとしても、きつと同時代の僧が、こうした術を行っていたのであろう。

この話のうち一つ目の、壇を設けた祈雨は、説経による仏教の基本的な祈雨法であろうが、あと二つの術では積極的に呪具が用いられている。不空がインドの僧であることや、この呪具の中に白檀の香木や泥龍があることを勘案すると、これらはみなインドの術だと思われる。

前節では、泥で龍を作つて雨を制御する中国の術を見たが、インドでも同じようなことが行われていた。密教經典『大雲輪請雨經』などの中には⁽²⁹⁾、祈雨儀式のとき、法座の四面に牛糞などで龍を画作すべきことが説かれている。龍は洋の東西を問わず存在し、どこでも水と深く関係した動物であった。つまりインド世界でも、雨を管理していたのは龍であり、雨の問題に関しては、諸仏の助けを借りながら、龍に働きかけるのが肝要だったのである⁽³⁰⁾。

このように密教僧らは、インドから各種の經典とともに幾種もの呪術を中国に運んできた。しかし、そのどこを見ても善無畏らに似た術はない。雨を降らせる儀式では、どこでも大抵水を用いたり供えたりする。また鉢と呼ばれる器は、僧であれば誰もが持っていた。しかし

善無畏らのように、鉢に水を入れて攪拌し、鉢水中に龍を現す術は、中国のみならず、インドにも見出すことができない。

インドについては、もう一つ書かなければならないことがある。それは、インド人はジャダ石を知っていたという事実である。ただしそれは祈雨石でなく、薬用としてであった。医療技術を記した經典として東方にもよく広まった『金光明最勝王經』の中に、石は瞿盧折娜という名で見えている。この瞿盧折娜を粉碎し、他の薬と混ぜて水に入れる。そしてこの水を浴びれば、諸悪、障難が悉く除滅されると經は説いている⁽³¹⁾。ジャダ石が薬として用いられたのは中国と同じである。とすればインドでも中国同様、ジャダ石が雨を呼ぶという発想は生まれ難かつたと考えられる。

さて以上のことをもとにすれば、善無畏の術の出所はより絞られる。善無畏の術は、中国生まれでもインド生まれでもない。とすれば、それは仏教の東伝ルートであった中央アジア、いわゆる西域である。その西域で盛んに行われていた祈雨術は、ジャダであった。

四 結び—なぜジャダは北方から入らなかつたのか

『高僧伝』に見える涉公と善無畏の祈雨呪術は、上述のように、内容がジャダとよく似ていること、そして西域から齎されたと推察されることから、ジャダであった可能性が高いと考えられる。

わずかな資料と根拠しか示せないのは残念であるが、もしこの見解に誤りがないとすれば、中国国内でジャダが行われた珍しい記録を得

たことになる。

それならばジャダは、北アジア、中央アジアという広範な地域に盛んでありながら、なぜこのように北方からでなく西方から中国に入ってきたのだろうか。またなぜ中国でのジャダの記録はこれほど少ないのだろうか。

これらの理由は、主に中国と周辺地域との気象条件の違いにあると考える。

北アジアや中央アジアでジャダが頻繁に積極的に行われたのは、彼の地の気候にそれだけ激しい変化があったからであろう。ただし北アジア、中央アジアの全域がそうなのではない。この地域は主に砂漠と草原地帯から成っているから、たしかに中国と比べれば気候は激しいのであるが、この中でとりわけ目まぐるしい変化を見せるのは、砂漠や草原の間に存在する高山や高地である。高山や高地では、真夏の晴天下でも、突然雲に覆われて雪や雹が降ることがある。厳寒期であれば、なおも厳しく危険な状況に見舞われる。ジャダは、こうした気象条件ゆえに生育した術なのである。ということは、この地域から外れると、ジャダの術はうまくできないということである。柔然のジャダ術者の——おそらくこれはシャマンだったと思われるが——こんな話が残っている。

或とき中夏に於てこれを為さしむ。則ち暄るも雨ふらず。その故を問うに、暎かきを以てなりと云う。

〔梁書〕卷五四、諸夷伝、芮芮国⁽³²⁾

柔然の術者は、モンゴル高原では自在にジャダを操っていたのに、中国に入るとその魔力を失ってしまった。中国の気候は温暖で、変化

が少なかったからである。

ジャダが、気象変化の激しいアジア内陸の高原地帯ならではの術だとすれば、ジャダの古記録が北方民族の一部にしかないのも納得がいく。ジャダの記録は、柔然、突厥に属していた薛延陀、回鶻、そして蒙古といった、モンゴル高原に拠を置いた民族にしか残っていない⁽³³⁾。この外にも中国北方には、鮮卑、契丹、女真などの民族が活動したが、そこにはジャダが行われた痕跡がないのである⁽³⁴⁾。この理由は、おそらく記録の不足や不備ではない。鮮卑、契丹、女真らにジャダがなかったためであろう。つまり鮮卑、契丹、女真らの根拠地は、みな大興安嶺とその東側であり、すなわちそこはモンゴル高原とは違つた、森林が広がり気候の安定した暎かき土地だからである。こうした自然条件と気象条件ゆえに、ジャダは中国東北地域には浸透せず、北方から中国に入ることがなかったであろう。

その北方に比べると、中国の西方中央アジアは、シルクロードが通る西方世界に開かれた地域であった。よって、はるか西方から中国を目指して旅する人々はここに集中した。仏教が東漸したのもこの路であり、仏僧たちは斬新な西方文化を携えて、次々と東に向かった。中央アジアでも、祈雨呪術を能くしていたのは、主にシャマンだったと思われるが、ここを通過していく仏僧にも、術者としての資質が十分にあった。仏僧は学問ある宗教家であるとはいえず、世間の意識からすれば、一種の呪術者であった。とすれば、人々から僧にもジャダの行使が求められるようになるのは、自然なことであろう。そのため僧の中にもジャダを習得する者が現れた。そしてその一部の者が中国にジャダを運んだのであろう。後世の記録を見ると確かに、ジャダを行

使した者の中にはラマ僧が少なくない⁽³⁵⁾。

中国の早に際して行われた仏僧のジャダは、ごく一部の知識人を除けば、誰の目にも未知の魔術であった。中国旧来の術が効果を現さない状況では、この術にはかなりの期待が集まったことであろう。しかし中国の気候は、西域とは違った。気象の変化を掴むのは至難であった。したがってその多くは、失敗に終わったと思われる。雨が降らなければ、記録は残らない。術が中国に広まることもない。西域のジャダを成功させた涉公や善無畏らは、よほど優秀な観天望気術者だったのであろう。

註

- 1 鴛淵一「初期蒙古族の禱雨について」(『古代学』一—三、一九五二)、岩井大慧「遊牧民族鮮苔資料匯集」(『遊牧社会史探究』七、一九六二)、同「遊牧アジア北方民族の禱雨について」(『駒澤史学』一〇、一九六二)、同「聖盧折郷考」(『駒澤大学文学部紀要』二〇、一九六二)
- 2 ジャダの文化については、前掲岩井氏「遊牧民族鮮苔資料匯集」がもっとも詳しい。
- 3 『輟耕録』卷四、禱雨
 往往見蒙古人之禱雨者、非若方士、然至於印令・旗劍・符圖・沓訣之類、一無所用、惟取淨水一盆、浸石子数枚而已、其大者、若鷄卵、小者、不_レ等、然後默持密呪、将石子洶瀟玩弄、如此良久、輒有雨、豈其靜定之功已成、特假此以愚人耶、抑果異物邪、石子名曰鮮苔、乃走獸腹中所産、独牛馬者最妙、恐亦是牛黄狗宝之属耳、
 楊瑀の『山居新語』にも、これとほぼ同じ記事がある。楊瑀は陶宗儀とほぼ同時代の人で、陶宗儀は楊瑀の記事を引用したものと思われる。
- 4 牛黄や狗宝は、『本草綱目』卷五〇、獸部に説明がある。
- 5 『本草綱目』卷五〇、獸部
 鮮苔生走獸及牛馬諸畜肝胆之間、有肉囊裹之、多至升許、大者如鷄子、

小者如栗如榛、其状白色、似石非石、似骨非骨、打破層疊、嘉靖庚子年、斬州侯屠殺一黄牛、得此物、人無識者、有番僧云、此至宝也、牛馬猪畜皆有之、可以祈雨、西域有密呪、則霖雨立至、不知呪者、但以水浸搬弄、亦能致雨、：

6 モンゴル帝国オゴタイの頌を記した『黒韃事略』には、
 極寒無雪、則磨石而禱天、
 というジャダの記事が見える。「石を磨す」とは、石を撫でる、擦るの意味であるから、この場合は石を水に漬けてから擦ったのであろう。

7 『高僧伝』卷一〇、神異下、涉公伝
 涉公者、西域人也、……以符堅建元十二年、至長安、能以祕呪呪下神龍、每旱、堅常請之呪龍、俄而龍下鉢中、天輒大雨、堅及群臣親就鉢中觀之、咸歎其異、堅奉為國神、士庶皆投身接足、自是無復炎旱之憂、
 なお涉公の伝は、『晋書』卷九五、藝術伝にも設けられている。

8 『宋高僧伝』卷二、訳経篇第一之二、唐洛京聖善寺善無畏伝
 积善無畏、本中印度人也、……属暑天亢旱、遣中官高力士、疾召畏祈雨、……有司為陳請雨具、幡幢螺鈸備焉、畏笑曰、斯不足以致雨、急撤之、乃盛一鉢水、以小刀搅之、梵言数百祝之、須臾有物如龍、其大如指、赤色、矯首瞰水面、復潜于鉢底、畏且搅且呪、頃之有白氣、自鉢而興、逕上数尺、稍稍引去、畏謂力士曰、亟去、雨至矣、力士馳去、迴顧、見白氣疾旋自講堂而西、若一匹素、翻空而上、……

9 鳥居竜蔵「遺代の画像石墓」(一九四二)、『鳥居竜蔵全集』五所収、一九七六) 参看。
 善無畏の祈雨の話は『太平広記』卷三九六、雨の項にも載せられている。善無畏の弟子李華が撰した「玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚卿行状」(『大正新脩大藏經』史伝部二所収)は、善無畏が中インドで観音を念じ地に水を注いで雨を祈ったことを書いているが、玄宗のときの祈雨については触れていない。

10 『高僧伝』卷一〇、神異下、积保誌伝
 积保誌、本姓朱、金城人、少出家、止京師道林寺、……天監五年冬旱、零祭備至、而未降雨、誌忽上啓云、誌病不差、就官乞治、若不啓、百官必得鞭杖、願於華光殿講勝鬘請雨、上即使沙門法雲講勝鬘、講竟夜便大雪、誌又云、須一盆水、加刀其上、俄而雨大降、高下皆足、

11 パラス「カルミユック族の天気魔術師」(前掲岩井氏「遊牧民族鮮苔資料匯

集(所引)

- 12 前掲岩井氏「遊牧民族酢苔資料匯集」
- 13 宮川尚志「六朝時代の巫俗」(『史林』四四一、一九六一)、『六朝史研究』宗教篇所収、一九六四、中村治兵衛「唐代の巫」(『史淵』一〇五、一〇六、一九七一)、『中国シャーマニズムの研究』所収、一九九二、向柏松「中国水崇拜」(一九九九)など。
- 14 『後漢書』卷三五、曹褒伝
(永元七年)出為河内太守、時春夏大旱、糧穀踊貴、褒到、乃省吏并職、退去姦殘、澍雨數降、其秋大孰、百姓給足、流冗皆還、
- 15 『古今圖書集成』曆象彙編庶徵典など参看。
- 16 『春秋繁露』卷一六、求雨
以甲乙日、為大蒼龍一、長八丈、居中央、為小龍七、各長四丈、於東方皆東鄉、其間相去八尺、小童八人、皆齋三日、服青衣而舞之、田疇夫亦齋三日、服青衣而立之、諸里社通之於閭外之溝、取五蝦蟇、錯置社中、池方八尺、深二尺、置水蝦蟇焉、具清酒脯脯、祝齋三日、服蒼衣、拜跪陳祝如初、
- 17 『春秋繁露』卷一六にある止雨の条には、土龍のことは書かれていない。そこには祝を呼んで社を祭らしめ、赤糸で社を十周巻き、朱衣朱幘を身に着けるなどの方法が説かれている。つまり陽を開いて陰を閉じ、水を圍んで火を開くという陰陽理論による止雨法である。
- 18 『唐書』卷一三八、馬璘伝
(永泰初)、天大旱、里巷為土龍、聚巫以禱、曰、旱由政不修、即命撤之、明日雨、是歲大穰、
- 19 『後漢書』卷八一、独行伝、戴封
(戴封)遷西華令、……其年大旱、封禱請無獲、乃積薪坐其上以自焚、火起而大雨暴至、於是遠近歎服、
- 20 出石誠彦「上代支那の早魃と請雨―その説話と事実と―」(『史観』八、一九三五)、『支那神話伝説の研究』所収、一九四三
- 21 三国演義「第四九回「七星壇に諸葛 風を祭り、三江口に周瑜 火を縱つ。」(小川環樹訳、一九五七)
- 22 劉枝萬「台湾道教の法器」(『道教』三、一九八三)など参看。
- 23 「太上元始天尊説大雨龍王經」、「太上護国祈雨消魔經」(『正統道藏』洞真部本文類辰一〇所収)、また「太上洞淵説請雨龍王經」(『正統道藏』洞玄部本文

類乃九所収)など。

- 24 『高僧伝』卷二二、誦經七、釈法相伝
(晋元興末)時有竺曇蓋・竺僧法、並苦行通感、蓋能神呪請雨、為揚州刺史司馬元顛所敬、
- 曇蓋の請雨は、『法苑珠林』卷七九所引「冥祥記」に載っている。曇蓋は「海龍王經」を説誦したという。
- 25 『高僧伝』卷六、義解三、釈慧遠伝
潯陽九旱、遠詣池側、誦海龍王經、忽有巨蛇、從池上空、須臾大雨、歲以有年、
- 26 善無畏や不空の活動とその時代背景については、藤喜真澄「隋唐時代の仏教と社会」(二〇〇四)参看。
- 27 『西陽雜俎』前集卷三、貝編
梵僧不空、得總持門、能役百神、玄宗敬之、歲常旱、上令折雨、不空言可過某日、令折之、必暴雨、上乃令金剛三藏、設壇請雨、連日暴雨不止、坊市有漂溺者、遽召不空、令止之、不空遂於寺庭中捏泥龍五六、当溜水、胡言罵之、良久復置之、乃大笑、有頃雨霽、玄宗又嘗召術士羅公遠、与不空同折雨、互校功力、上俱召問之、不空曰、臣昨焚白檀香龍、上令左右搗庭水嗅之、果有檀香氣、
……不空每折雨、無他軌、則但設教續座、手撥旋数寸木神、念呪擲之、自立於座上、伺木神、吻角牙出目眦、則雨至、
- 『太平広記』卷三九六、雨の項の「不空三藏」は、『西陽雜俎』から不空の折雨の話だけを引いてまとめているが、説解するときの参考になる。
- 28 『大正新脩大藏經』史伝部二所収
- 29 北周闍那耶舍訳「大方等大雲經請雨品第六十四」一卷、同訳「大雲經請雨品第六十四」一卷、隋那連提耶舍訳「大雲輪請雨經」二卷、唐不空訳「大雲輪請雨經」二卷および「大雲經折雨壇法」一卷(いずれも「大正新脩大藏經」密教部二所収)は、全てもと同じ經典の異本異訳である。それぞれの經の壇法部分には、この經の用途が折雨と記され、闍那耶舍訳「大雲經請雨品第六十四」だけが、折雨および止雨としているが、經典部分を見ると、全部が折雨と止雨の為の經であることが明らかである。なお止雨の經典として、唐菩提流志訳「金剛光焰止風雨陀羅尼經」一卷(『大正藏經』同卷所収)というものもある。
- 30 出石誠彦「龍の由来について」(『東洋学報』一七一、一九二八)、『支那神

話伝説の研究』所収、一九四三、白鳥清「龍の形態に就いての考察」(『東洋学報』二一一二、一九三四)、瀧澤俊亮「龍蛇と祈雨の習俗について」(『東方宗教』二〇、一九六二)。また註29の経典を参看。

31 前掲岩井氏「瞿盧折娜考」
『梁書』卷五四、諸夷伝、芮芮国

32 或於中夏為之、則・而不雨、問其故、以嘆云、
古代北方遊牧民が行ったジャダの記録をあげると次のとおりである。

33 『梁書』卷五四、諸夷伝、芮芮国
其国能以術祭天、而致風雪、前对皎日、後則泥濘横流、故其戰敗、莫能追及、
『旧唐書』卷一九五、廻紇伝
初白元光等、到靈台县西、探知賊勢、為月明、思少陰晦、廻・使巫師使致風雪、及運明戰、吐蕃尽寒凍、弓矢皆糜、披・徐進、元光与廻・随而殺之、蔽野、

『唐書』卷二二七下、回鶻伝下
(薛延陀) 殘卒奔漠北、会雪甚、衆戰踏死者十八、始延陀能以術・神致雪、
莫困勦師、及是反自敵云、

これらにジャダの名は見えないが、研究者はみなジャダの古記録と見なしている。術の内容や、各民族の活動圏からみれば、全く妥当な見解だと考えられる。どのジャダも戦場で使われているが、元代モンゴルのジャダの記録も、みな戦場におけるものである。

『モンゴル秘史』には、チンギス・カハンの軍と対峙したブイルク・カンらの術のことがこう書かれている。

ブイルク・カンとクドカの二人はジャダを知っていた。そこでジャダを行くと、風雨は逆に彼らの頭上に起こってしまった。彼らは進むことが出来ず、淵の中に転倒して、「天神の加護が得られなかったぞ」と言い合って壊滅してしまった。……(『モンゴル秘史』卷四(村上正二訳注、東洋文庫一六三、一九七〇)から節略。)

またラシッド・ウッディーンの『集史』には、モンゴルのツルイが術を使って金軍を破ったことがこう書かれている。

ツルイは進退窮まって、ジャダの魔法を利用すべきことを命じた。その法によれば、ある石を水に浸した後これを拭くと、盛夏でも暴風がおこって雪が降り厳寒となり、少なくとも強風が起る。蒙古軍内には一人の康里人がいて、……巧みにその法を修めた。まず雨を降らし、翌日は雪

を降らし暴風を起こし、しかも朔風は肌を刺した。支那兵は、盛夏なのに冬季にもかかわらず経験したことのない気温を感じて、全く勇気を失った。……(ドーソン『蒙古史』(田中幸一郎訳補、岩波文庫下巻、一九三八)附録註第一「ラシッドの拖雷支那遠征記事。附蒙古人の魔法、卜筮、迷信。」から節略。)

34 祈雨というものは、一般的には農耕地域においては旱魃を救うために、草原地帯では草原を枯死から救うために行われるものであるが、ところがジャダの古記録の多くは、このように戦争で勝利をおさめるための天候操作を伝えている。この使用用途は北方遊牧民族のジャダの一特徴といつてよいであろう。しかし北アジアでジャダは戦争専用としてあつたわけではない。それほど実用的な技術として、盛んに用いられていたということである。

契丹の祈雨法については、島田正郎「契丹射柳攷」(『民族学研究』一五一、一九五〇)、『遼朝史の研究』所収、一九七九、王承礼「契丹的瑟瑟儀和射柳」(『民族研究』一九八八―三)、拙稿「契丹瑟瑟儀の一解釈」(『東海女子大学』紀要二三、二〇〇四)などがある。

35 岩井氏の「遊牧民族鮮苔資料匯集」から西欧文献の一部の内容をまとめてみると、次のようにある

著者	書名	刊行年	ジャダ実行地域・民族	ジャダ実行者
ベヴェリツチ	中亜旅行回想録	一四九三― 一五二八	フェルガーナ地方	鷹匠
サイフィー	中央アジア史	一五八五	トルファン クリミア	人々 術者
パラス	カルミユック族 の天気魔術師	一八〇一	カルミユック族	ラマ僧 学問ある普 通の人
ミノール・イザ トゥラー	西藏からヤール カンドへの旅	一八二五	ヤールカンド	術者
チムコウスキー	トルキスタン紀行	一八二七	トルキスタン人 タングート人 オイラット人	人々 ラマ僧

一五世紀より後のことになるが、これによれば、ジャダが中央アジアの全域で様々な人物によって行われていたことがわかる。ジャダ実行者の中には、ラマ僧が見えている。術者というのは、おそらくシャマンをさすのであろう。実行者の中には一般人の人もいる。ジャダの術は、はじめ一部の呪術者から始まり、次第に一般人の間にも日用的技術として広がっていったのであろう。なお本文では触れなかったが、ジャダは西域の南方チベットやカシミールでも行われていた。マルコポーロ『東方見聞録』（愛宕松勇訳注、一九七〇）の第一章に、元朝大都でジャダが行われていたことが記され、その術者が「チベット」とか「ケスミール」と呼ばれていたとある。チベットのジャダは、同書第四章にも語られている。

（拙稿を記すに際し、岐阜大学農学部獣医学科の北川均先生から、ジャダ石の実物と貴重なご教示を頂いた。記して感謝を申し上げます。）